福岡教育大学紀要，第71号，第５分冊，39－48（2022）

大学と幼稚園の連携による幼児のための音楽鑑賞会の実践と考察

Practice and Consideration of Music appreciation party for pre-school Children in Kindergarten

山　本　百合子　　井　上　友里子

Yuriko YAMAMOTO　　Yuriko INOUE

音楽教育ユニット

（令和３年９月30日受付，令和３年12月23日受理）

音楽科教員を目指す大学生とその養成にあたる大学教員そして附属幼稚園の連携によって実現してきた，幼児を対象とするクラシック曲主体の生演奏鑑賞会の５年間にわたる実践について，コーディネーター兼指導者の教員からの全般的な成果報告と考察，そして実践例としてロマン派のピアノ作品による演奏実践に携わった教員による選曲意図や演奏の工夫をめぐる報告をする。就学前年齢の幼児を対象としたクラシック音楽の鑑賞機会の企画における留意点や，幼児教育における音楽鑑賞の意義，教育者を目指す学生の実践研究における重要な学びについて考察した。

0. はじめに

本稿は，５年前の2016年度から開始した，大学の音楽科もしくは音楽科教育を専攻する学生と教員による，附属幼稚園での「音楽のプレゼント」提供活動を通じた，幼児教育の教育研究活動実践の報告と考察である。活動当初よりこれを企画・運営・指導してきたコーディネーター教員の山本と，昨年度よりこの活動の企画と指導に参加し，今年度ピアノ演奏に従事しながら実践と指導の方向性を探っている若手教員井上による共同での執筆とする。

1. 連携活動の背景と経緯

本学（福岡教育大学）の附属幼稚園は，本学赤間キャンパスの最西端にある音楽教棟に最も近い位置に園舎を構え，３～４歳児（ちゅうりっぷ組）・４～５歳児（さくら組）・５～６歳児（ぽぷら組）の３クラスに定員計90名の園児を受け入れている。学校教員の養成を主軸とした教育研究組織である本学（大学）は，学校教育の各教科専門の教員と学生を擁するので，附属幼稚園との連携活動として，例えば国語科による絵本の読み聞かせや，美術科による創作支援，理科や技術家政科による自然観察や植物栽培とそれらを生かした知育遊戯や調理実践などの教育活動支援をはじめ，各教科専門の教員や学生が多角的に幼児教育の実践研究を行なってきている。

そのような中で音楽科は，教員を目指す学生とその養成に携わる教員が，附属幼稚園の毎月のお誕生会において「音楽のプレゼント」と称する音楽の生演奏鑑賞会の企画実践を始め，今年度（2021年度）は６年目を迎えた。もとはと言えば，かつての音楽教育講座（現 音楽教育ユニット）所属でピアノ演奏を専門とする吉田眞理教授が附属幼稚園長を務めていた時期に「園長先生から園児たちへの音楽のプレゼント」として定期的に園内でクラシック音楽の名曲をピアノ演奏で披露していたのが始まりであった。2015年度末をもって吉田教授が定年で園長の任期を終えられると，幼稚園側からも定期的な生演奏鑑賞の機会が無くなるのを惜しむ声が上がった。そして，当時，大学の幼児教育研究部会の一員として附属幼稚園の教育研究活動に関わり，園の行事をはじめとする教育活動や園児たちの様子をある程度把握していた山本が，音楽科学校教員を目指す学生たちにとって幼稚園児の前での生演奏披露を通じた学び

の大きさを確信し，低年齢児への音楽教育の意義やあり方の実践研究の場として，また学生たちが最も演奏技術の鍛錬を重ねてきているクラシック音楽の名曲の良さや価値をいかに伝えることができるか，といった課題意識から，附属幼稚園の毎月のお誕生会における「音楽のプレゼント」の活動を，音楽科の学生と教員の協働によって改めて企画実践することとなった。

2. お誕生会のなかの「音楽のプレゼント」

附属幼稚園では，毎月の特定日の午前中に全園児がホールに集まり，3クラス合同でその月に誕生日を迎える園児のお誕生会を催している。2020年2月下旬に新型コロナウィルスによる感染症が流行し始めて以後は，一時期は中止を余儀なくされ，その後やり方も少し変化はしたものの，従来の内容と流れは以下の通りで，現在も骨組みや流れの原則は同じである。我々が連携活動として実践している「音楽のプレゼント」は，全30～40分のお誕生会の終盤のプログラムである。

【お誕生会の原則的なプログラムと流れ】
・お誕生会 開会の辞
・月毎の歌
・附属幼稚園 園歌
・誕生日を迎える園児の紹介
・お誕生日の歌
・園長先生からお祝いのカード授与
・園長先生のお話
・誕生日を迎える園児の保護者のお話
・記念写真撮影
・園児による出しもの
・大学生による 音楽のプレゼント
・お誕生会 閉会の辞

これらのプログラムは，総合司会役の教諭の導きによって，年長クラスの園児が数人組でプログラム毎のアナウンスを務めて進行するよう組み立てられており，分担した園児たちは次々に交替で前に出てきてアナウンス等をすることで，晴れの場面での自らの役割を果たすという適度な緊張感も持ちながら，自分たちの力でお誕生会を行う実感や達成感を得たり，あるいは年上の園児たちが立派に会を進行する姿を見ることで年下の園児が憧れたり学んだりする機会にもなっている。

3歳から6歳の幼稚園児たちは，ホールの正面雛壇に向かって，最前列に年少クラス（ちゅうりっぷ組），二列目に年中クラス（さくら組），そして最後列に年長クラス（ポプラ組）が横一列に椅子を並べて着席するが，その月に誕生日を迎える園児の椅子の背もたれには，動物（パンダ）の顔のデザインされた特別なカバーがかけてあり，園児たちは，ホールに入場して自席に着席すると，今月誕生日を迎える園児が誰なのか，自他共によく分かるのである。

写真1　2018年12月の様子（左手最後列は保護者）

ホールには，正面に向かって左手寄りにグランドピアノが置かれていて，園児が月毎の歌や園歌あるいは誕生日の歌を歌う際には，教諭の1人がピアノで伴奏を弾くのが通常だが，それ以外にも，誕生会の主役すなわちその月に誕生日を迎える園児たちが自席から雛壇に移動する際に〈ハッピーバースデイ〉の歌のメロディを伴奏したり，アナウンス役の園児グループが進行アナウンスをするために雛壇に出て来たり自席に戻ったりする際にも，登退場の伴奏として，調子良く歩くリズムを与えるような，よく知られた子ども向けの歌の一節が演奏される。

複数の人（子ども）を，歩調を揃えて秩序正しく移動させたりする際に，このようになんらかの音楽を鳴らすことで，キッカケ（合図）を与えたり動き易くしたり行動意欲を支えたりする演出は，学校をはじめ集団教育を行う場での音楽の役割として有意義かつ有効なことで，古くから幅広い文化の中で行われてきた手法であるが，附属幼稚園のお誕生会におけるそれは，ピアノ演奏の堪能な教諭が，主体（園児たち）の様子をよく見ながら，主体の個性に合わせて，例えば同じ〈ハッピーバースデイ〉のメロディでも，年少児・年中児・年長児の違いで音域や音量やテンポを変えて生演奏しているのは，機能的な音楽の使い方としても，音楽を介した表現やコミュニケーションのあり方としても，大変素晴らしい手法であること

を報告しておく。

さて，我々の提供する「音楽のプレゼント」を含むこのお誕生会の中での園児自身の行う音楽的な活動には，さきに示した流れにある通り「月毎の歌」や「園歌」や「お誕生日の歌」などの，園児たちが折にふれ歌って知り親しんでいる歌を全員で‘歌う’場面がいくつかあり，また教諭のピアノ伴奏に促されて登退場などの移動を行うような場面もあり，全体として非常に音楽の豊かな構成となっていることは確実だ。ただし，園児たちが‘音楽を聴く’‘音楽にじっと耳を傾ける’という場面は，「音楽のプレゼント」のプログラムだけであろう。お誕生会のプログラム後半の「園児による出しもの」では，毎月交替で３クラスのうちの１クラスが，クラス全体で歌や遊戯などの出しものを演じるが，その内容は殆どの場合，音楽を聴かせるというよりも，簡単な衣装を着けたり自身で手作りした小道具を持ったりした園児たちが，音楽にのって踊ったりクイズを出したりする姿を見せるのが主眼で，音楽は園児の演技やクイズなどを支える目的で演奏されていて，観客が意識を集中する対象とはなっておらず，音源も電子楽器による演奏の録音素材が用いられることが多い。従って，このお誕生会で園児が意識的に‘音楽に耳を傾けて味わう’のは，我々が行なっている「音楽のプレゼント」の場面に限られていると言ってよい。

そして，この「音楽のプレゼント」の活動において我々が最も重要視しているのが，「鳴り響く音楽そのものにじっと耳を傾け，音を通じて様々な想像をめぐらせる」という行為であり，時間である。

家庭でも学校や街中でも交通機関においても，放送や音楽再生機器が行き渡り，望まなくてもあらゆる場面に多くの音や音楽が流れている現代社会において，幼稚園児たちも成長と共に近い将来（いや，もしかしたら既に）携帯端末や電子機器にイヤホンを繋いで，ゲームやアニメの付随音楽や流行の大衆音楽を聴き親しむ（親しんでいる）に違いない。しかし，生身の人が，磨き上げた喉で声を出して歌ったり，鍛錬を積んだ技術で楽器を弾いたりして音楽を奏でる姿を目の当たりにし，その音を直に聴くことは，それらとは明らかに異なる体験であり，現代社会において乏しくさえなっている。生演奏される音楽が自分に向かって何かを問いかけてくるような経験，すなわち「生演奏の鑑賞による音楽とのコミュニケーション」は，自ら歌を歌ったり楽器を奏でたりする表現の楽しさや味わいと同等に，五感が著しく成長する時期の幼い子どもたちに大きな刺激となろう。生演奏の鑑賞活動を通じた「音楽を聴く力」の育成は，表現の能力ひいてはコミュニケーション能力全般を育む上での重要な体験のひとつだと，筆者は考えている。

3. 幼児のための音楽鑑賞

では，未就学年齢の幼稚園児に有意義な音楽の鑑賞をさせる時，どのようなことを念頭に置く必要があるだろうか。この項では，５年間の実践を通じた観察や手応えに基づき，幼児を対象に音楽鑑賞を企画する際の留意点や，その根拠につながる意図や目的などについて述べる。５年間に実践した内容については，【表】にまとめているので参照されたい。

3. 1. 幼児の音楽鑑賞における時間

音楽は時間芸術であり，音楽を実体として受けとめるには，必ず一定時間，音楽の聴取に意識を集中させる必要がある。音楽を含む上演芸術（パフォーミングアーツ）は，芝居やお話（語り）も同様だが，聴く側の集中力の維持がどれぐらいの時間にわたり可能なのか（期待できるのか）を，的確に把握した上で内容等を選定することが重要だ。

幼稚園児の場合，言葉で話したり，絵や動画を見せて語りかける絵本の読み聞かせやお話（語り）のようなものを聞くのに比べて，音楽を聴くという行為は具体的／日常的な情報が乏しく，なかでも歌詞（言葉）の無い純粋器楽曲であれば極めて抽象的で目に見えない情報の塊を受け取る行為とも言えるため，意識を集中できるのは，連続してせいぜい２分から３分が限度であると言われているし[注1)]，筆者自身も経験的にそのように実感している。

我々の「音楽のプレゼント」も，最も年齢の低い３歳児を想定するなかで，意識を集中できる演奏時間は２分半を目安とし，長くとも３分以内に完結する演奏とできる楽曲を探すことを標準にした。しかし，既存のクラシック音楽の名曲には，オリジナルのままで２分半の時間に収まるものは決して多く無い。そのため，本来は４分や５分の時間を要する作品を，その骨組みや，音楽的に重要な素材・響きを損なわない範囲で，２分半の演奏にまとめる作業が求められる。作家の創り上げた芸術作品全般において当たり前なことではあるが，クラシック音楽の楽曲の場合は特に作品の自

律性や細部の必然性が強く，作曲家が作品の隅々まで過不足なく構築している作品ばかりなので，制限された時間内にその作品の魅力やメッセージを入れ込むための演奏上の工夫は，個々の音楽作品の時代様式や作家の個人様式，音楽の理論上の整合性などの理解があって初めて，ある程度的確に行える。こうした時間的条件に作品を当てはめる作業は，単に物理的・表面的な切り貼り作業ではなく，学生にとっては作品の構造を丹念に学び直さねばならないという有意義な課題の発生を伴う。

3. 2. 鑑賞曲の選定（ジャンル・編成）

また，本活動を学生に行わせる上での趣旨として，演奏する学生たちが演奏力の鍛錬を積んでいるジャンルで，同時に園児たちが日常生活の中で触れる機会の少ない上質の文化であるクラシック音楽の名曲を選定することは，出発点から重視してきた条件であった。音楽鑑賞の教育的意義を考える時，聴き手にとって既に親しみのある作品や題材の演奏によって，演奏法や演奏技術に対する興味が促されたり，音楽的な表現の細部への関心や観察力が高められたりすることはあるだろう。一方で，自力では出会う機会が少ない，未知の音質や表現による楽曲には，与えられた機会があって初めて出会いが生まれ，結果として聴き手の世界や価値観に拡がりをもたらすことができるのも，鑑賞という教育活動の大きな産物である。「音楽のプレゼント」では，園側からの要望もあり，後者のような，園児が他の場ではなかなか出会えないクラシックの名曲との出会いを作ることも，一つの要件として楽曲選定を行なった。

園のホールにあるグランドピアノの音色を生かした演奏とすることも，本活動の背景から継続した大きな条件で，編成はピアノ独奏かまたは何らかの楽器もしくは声楽による演奏にピアノ伴奏のつく編成を原則とした。ただしこの部分については，活動開始当初の2016年度の時点では，原則をピアノの演奏として演奏人材（学生）の確保ができたものが，大学の課程編成の変換によってピアノ演奏を専攻分野とする芸術課程や大学院演奏学の学生が減少したことで，ピアノ以外の音楽種にも拡大せざるを得なくなったのが実のところではあった。しかしピアノ以外の楽器や声楽の演奏に範囲を広げていったことは，聴く側にとっての「音楽のプレゼント」の内容の豊かさにつながったと同時に，演奏する学生が実践を通じて発見することの広がり，つまりピアノ演奏の音響だけでなく各種の楽器や声楽の音響についても，幼児の聴取力や幼児への聴かせ方・表現の仕方について学ぶという成果を得る結果となった。

5年間の実践を通じて得られた，就学前年齢の幼児の音響への反応は以下のようなものである。

・ピアノの音響については，かなり高音から低音まで，そしてかなりの弱い音から強い音まで，殆ど抵抗なく聴取できているようである

・ピアノ以外の楽器については，その発音の仕組みや音色の特徴に対する関心が高い傾向がある

・弦楽器については（実践としては擦弦楽器のヴァイオリンと撥弦楽器の箏の演奏を行ったが），幼児の音響への関心は高い印象

・管楽器の音については，ピアノや弦楽器に比べ，音の圧力への抵抗感を部分的に示す（音の強いところで両手で耳を覆うなどの反応をする）子どもが少なからず見られる

・管楽器のうち，リード系木管楽器と金管楽器の演奏の際には，楽器から聴き手までの距離を十分に取ることで，音響への抵抗感を和らげることができる

・声楽についても，クラシック音楽の発声の場合は，管楽器と同様に音響に圧力を感じる子どもがいる

・声楽の演奏で，歌詞が日本語であれば，題材への理解は深まるが，外国語の歌詞であっても事前の題材説明によって，殆ど抵抗感や不理解を生じる様子はなく，サウンドとしての声楽表現を味わうことができているようであった

以上，鑑賞の主体が3歳から6歳の幼児であるので，あくまで鑑賞の場面における子どもたちの反応の様子や，反応から推測してさらに施した工夫等を通じて変化したと認められる状況に基づいた考察になるが，幼稚園児が，予想以上にクラシック音楽の名曲の演奏を楽しみ味わえているという手応えを我々は感じることができた。

3. 3. 鑑賞曲の選定（題材）

音楽作品の題材には，実際の音響現象を音楽的に再構築して作品化したものや，絵画的な情景だ

【表】2016 年度～ 2021 年度（上半期まで）の演奏内容

年度	月	演奏形態	曲　目	担当学生
2016年度	4月	ピアノ独奏	モーツァルト作曲《トルコ行進曲》	（ピアノ教員1名）
	5月	ピアノ独奏	オースティン《アルプスの夕映え》	4芸音1名
	6月	（担当調整不能により実施せず）		
	7月	サクソフォンとピアノ	ハーライン作曲《星に願いを》	4初音1名・4芸音1名
	9月	台風により中止		
	10月	ピアノ独奏	ドビュッシー《亜麻色の髪の乙女》	4芸音1名
	11月	ピアノ連弾	ドビュッシー作曲《小組曲》より〈小舟にて〉	院1年2名
	12月	ピアノ独奏	ギロック作曲《雪の日のそり滑り》	4芸音1名
	1月	箏二重奏	《さくら変奏曲》	院1年2名
	2月	3名の奏者によるピアノ連弾	フレール作曲《For Kids》	4芸音3名
	3月	（担当調整不能により実施せず）		
2017年度	4月	（担当調整不能により実施せず）		
	5月	（担当調整不能により実施せず）		
	6月	ピアノ連弾	木下牧子作曲《やわらかな雨》	院2年2名
	7月	トロンボーンとピアノ	スコットランド民謡《美しきドゥーン川の岸辺》	院1年1名・院2年1名
	9月	ピアノ独奏	三宅榛名《赤とんぼ変奏曲》	院2年1名
	10月	クラリネットとピアノ	メンデルスゾーン作曲《歌の翼に》	院1年1名・院2年1名
	11月	声楽とピアノ	童謡《七つの子》《どんぐりコロコロ》 シューベルト作曲《野ばら》	院2年2名
	12月	ピアノ独奏	モーツァルト作曲《きらきら星変奏曲》	4芸音1名
	1月	ヴァイオリンとピアノ	ヴィヴァルディ作曲 協奏曲集《四季》より 冬 第2楽章	3芸音2名
	2月	インフルエンザ流行により中止		
	3月	声楽とピアノ 3名の奏者によるピアノ連弾	木下牧子作曲《ロマンチストの豚》 フレール作曲《For Kids》	院2年2名 4芸音2名
2018年度	4月	フルートとピアノ	チャイコフスキー作曲《花のワルツ》（バレエ組曲 くるみ割人形 より）	4芸音2名
	5月	ピアノ独奏	ショパン作曲《子犬のワルツ》	院1年1名
	6月	ピアノ独奏	ショパン作曲《夜想曲》	院1年1名
	7月	（担当調整不能により実施せず）		
	9月	ピアノ独奏	ショパン作曲《前奏曲》2曲	院2年1名
	10月	ヴァイオリンとピアノ	《どんぐりコロコロ変奏曲》	院2年1名・院1年1名
	11月	朗読とピアノ連弾	《14匹の朝ごはん》	院1年3名
	12月	クラリネットとピアノ	チャイコフスキー作曲《花のワルツ》（バレエ組曲 くるみ割人形 より）	院2年2名
	1月	インフルエンザ流行により中止		
	2月	2つのヴァイオリンとピアノ	J.S.バッハ作曲《2台のVn.のための協奏曲》より 第1楽章	院2年1名・院1年2名
	3月	3名の奏者によるピアノ連弾	フレール作曲《For Kids》	4芸音3名
2019年度	4月	（担当調整不能により実施せず）		
	5月	ピアノ独奏	メンデルスゾーン作曲《5月のそよ風》	院2年1名
	6月	ヴァイオリン独奏	クライスラー作曲《美しきロスマリン》	院1年1名・院2年1名
	7月	声楽とピアノ	《七夕さま》《きらきら星》Jazzアレンジ	院2年2名
	9月	（担当調整不能により実施せず）		
	10月	声楽とピアノ	ベッリーニ作曲《私の美しい人よ》 木下牧子作曲《風をみた人》	4中音2名
	11月	オーボエとピアノ	ドヴォルザーク作曲《家路》（交響曲 第9番 第2楽章より）	4中音2名
	12月	ピアノ独奏	ショパン作曲《黒鍵のエチュード》	3中音1名
	1月	箏独奏	宮城道雄作曲《祭の太鼓》	3中音1名
	2月	新型コロナウィルス感染症の流行により中止		
	3月			
2020年度	4～1月			
	2月	ピアノ独奏	モーツアルト作曲《トルコ行進曲》・ リスト作曲《愛の夢》	3中音3名
2021年度	4月	新型コロナウィルス感染症の流行により中止		
	5月			
	6月	ヴァイオリンとピアノ	エルガー作曲《愛の挨拶》	4中音2名
	7月	ピアノ独奏	シューマン作曲《森の情景》より〈森の入口〉	（ピアノ教員1名）
	9月	ピアノ独奏	グリーグ作曲《抒情小曲集》より〈小鳥〉〈妖精の踊〉	（ピアノ教員1名）

とか特定の対象物の視覚的印象を音で描写しようとしたものが，特に時代様式としても存在するが，一方で視覚的なイメージとは裏腹な音響表現をあえて意図しているような作品もあれば，抽象的ないわば目に見えない想念や感情を音に託して表現した作品も多い。目には見えないものを音で表したり感じたりすることの面白さが音楽の醍醐味であり魅力ではあるが，幼児に鑑賞させる楽曲となると，抽象的な題材を伝えるのは困難な場合も少なくない。

2016年度の段階では，附属幼稚園の教育研究テーマに「自然」というキーワードがあり，「音楽のプレゼント」における曲目にも，自然自体を感じたり，自然から感じられる季節感などをテーマとした学びにつながることを条件に挙げていたため，鑑賞曲の選定においても自然や季節感をテーマとした音楽作品を扱おうとしてみたが，意外にも，クラシック音楽作品における自然をテーマとした実例の探索や，作品があったとしてもそこに描かれている自然の実態が，附属幼稚園児たちが実際に触れる自然とのつながるのかどうかという問題も発生した。なぜならクラシック音楽の多くが描く自然は，欧米の気候風土や文化の脈絡の中で捉えられたり感じられたりしている自然像であるからだ。小中学生であれば，国語科や社会科の学習を通じた知識の増量につれて，自分の暮らす環境とは異なる外国や異世界に対する想像力も期待でき，自分自身は見たこと感じたことのない自然を想像して，同時に音楽作品の音響とそれを結びつけることもある程度可能であるが，そのような二段階の想像は，就学前年齢の幼児の場合，できる幼児もいるかもしれないが多数派とは言えないだろう。その意味で，クラシック音楽作品の中から，幼稚園児に自然を感じさせる題材の作品を選定するのはなかなか困難な作業だった。

その後，活動が年を重ねるにつれ，附属幼稚園の教育研究テーマに縛られず，園児の多くが鑑賞曲を通じて何らかの音響的印象や具体的なイメージを思い描き易い題材の作品を選定することになった。

3. 4. 演奏の仕方

実践活動の中で学生たちが最も学ぶところが大きかったのが，演奏の仕方である。幼児に対する大人の一般的な接し方（コミュニケーションの仕方）に通じることだが，幼児へ投げかける音声や言葉は，その速度や発音や言葉選びに，当然ながら留意が要る。

まず速度。通常の表現速度よりも若干速度を落としての表現が，幼児には伝わり易いという実感を得た。学齢以上の子どもや大人であれば，楽曲の指定の速度や著しく速い／遅い表現の持つエネルギーを受け止められるものも，幼児の場合はわずかながら速度の幅を緩めることも必要あるいは効果的であると感じた。

そして，音楽表現における語彙とも言える，強弱の差異やフレーズのまとまりと切れ目，和音の変化などをどうコントロールするかについては，その変化や切り替わりをより丁寧に念入りに明白に顕すことが，幼児にとっての聴き取り易さや理解に繋がるのではないかという手応えを感じている。これは，会話や読み聞かせの表現に通じると思われることだが，幼児の認知機能に対しては，会話や講話においては言葉や音節をひとつひとつ明確に発することが伝達の精度を高めるのと同様に，音楽表現においても，ダイナミクスの切り替えの幅や，間の作り方が，伝達の度合いを左右すると考えられる。クラシック音楽の一般的な演奏技術を長く学んできている学生たちにとって，聴き手の認知や理解の能力を考慮して楽曲の演奏の速度や表現のダイナミクスを変えることは，むしろ作曲者の意図や時代様式などの忠実な再現を重視するクラシック音楽分野の視点からは避けられる傾向にあるため，積極的には学んでいない。しかしながら，音楽表現における聴者との関わり，奏者側から聴者の認知理解能力を意識した演奏のあり方を探ることは，特に幼児教育における音楽教育が独自に抱える重要な課題であり，同時に，再現芸術の表現はどうあるべきかという本質的な問いにも迫る問題かもしれない。

3. 5. 言葉等による説明（楽曲紹介）のあり方

学校教育の授業であれ，ラジオなどの放送や演奏会場でのコンサートであれ，多くの音楽鑑賞には言葉による楽曲紹介や楽曲解説が伴う。附属幼稚園での「音楽のプレゼント」も，演奏前に，演奏者は必ず園児たちに挨拶をして，その日に演奏する楽曲にまつわる情報を短く提示する。聴き手が幼児なため，当然ながら一般的な楽曲解説や音楽に関する専門用語，あるいは作曲家の出身国といった情報でさえ，幼児には未知で難解な情報が多い。そこで，音楽の（楽曲の）響きを味わう上でイメージや印象を脳内に展開し易くする手助けを，いかに適切な多過ぎない言葉などで提示するかは，重大な作業である。

音楽の抽象性ゆえに，その題材やタイトルにつ

いても，実は演奏する学生自身がわかったような気持ちになっていて実のところ理解が中途半端だったり思い込みだったりすることにも気づいたり，自分がいかに言葉で音楽を説明する力に乏しいかにも直面した例が多く見られた。勿論，名曲と言われる楽曲の作曲者は殆どが成熟した大人で，題材やタイトルには大人にならないと理解が難しい要素もあるが，音の響きからどのような気分や感情や情景を思い描くかという鑑賞活動の楽しみは，諸芸術の中でも音楽芸術がとりわけ幅広く許されている精神活動であろう。

そこで，演奏する学生たちには，選曲した作品の一般的な解釈や学問的な通説に捉われずに，幼児の世界観のなかで音楽を愉しむためにはどんな言葉の補助を行うのがいいのかを考えさせた。実践した学生の中には，元は歌曲のメロディを管楽器で演奏するかたちとした際に，歌曲に付けられた詩の内容を子どもの世界の子ども同士の物語に置き換え，簡易絵本を作成して提示した例もあった（写真 2）。

歌曲を歌った学生の 1 人は，空想的な歌詞の主人公に扮装することで，歌詞内容の可笑しみを確実に伝えようと奮闘した（写真 3）。

バロック音楽の抽象的な 2 本の主題の音楽的な絡み合いを味わう二重奏では，音楽構造を「かけっこ」「鬼ごっこ」といった子どもの世界で体験できている動作に例えて理解を促す工夫も生まれた（写真 4）。幼児にクラシック音楽を鑑賞してもらうための説明の試みは，説明を受けた幼児だけでなく，演奏する奏者たちの中にもたくさんの再発見や理解の深まりをもたらしたと思っている。

4. ピアノによる鑑賞曲演奏の実践と考察

本項では，井上が，幼児を対象に音楽鑑賞を行う時に教育的効果の高い選曲と演奏方法について，附属幼稚園でのクラシックのピアノ曲を用いた 2 回の実践を紹介し考察する。

4. 1. 幼児期における音楽の知覚と美的理解

人間は，新生児から生後 6 ヶ月の間に，知覚レベルにおいて和音における協和／不協和の違い（正高 2001），リズムやメロディの違いの弁別ができるようになる。さらに，杉本啓は，異なった感情価の音楽を聴取した時の乳児の手足・体感の身体反応の違いを比較した研究の結果から，乳児でも音楽の感情価の違いを捉えていると考えた[注 2)]。このように，人間は 1 歳前後で既に成人に近い音楽の識別能力をもっており，4 ～ 5 歳においては成人と同様の感情価を理解することが可能であることがこれまでの研究でわかっている。

写真 2　2017 年 10 月の様子（自作簡易絵本による解説）

写真 3　2018 年 3 月の様子
（歌曲の主人公に扮して演じながら歌う演奏者）

写真 4　2019 年 2 月の様子
（2 台の Vn と Pf. によるバロック作品を演奏）

幼児にも音楽の知覚は可能であるが，音楽の着想に関わった自然や文学のイメージを想像したり理解することはより難易度が高い。幼児との美術館における対話型鑑賞を通した鑑賞と体験の考察において，宮下東子は，「彼らの鑑賞の基盤は未

熟であるが，視覚から得た情報を自分の生活や感情，知っている形と照らし合わせてその作品について想像し，それを言葉にしようとする知的な活動を行っている」と述べた注3)。音楽においても，幼児は鑑賞活動の中で芸術作品から実体験を元にイメージを感じ取ろうとすると考えられる。幼児は成人に比べ出会いや経験が少ないが，芸術そのものを通して多様性を知り，想像することで自分の見聞きしたことのあるものとの違いを楽しむ心を養うことができるのではないだろうかと筆者は考える。

4. 2.「音楽のプレゼント」2回の実践

幼稚園で短時間の演奏というと，明朗で簡潔な作品が選ばれる傾向にあるが，芸術を鑑賞するという新たな経験を通した想像力の向上を期待し，筆者は，短調や，和声進行に不協和音を含む長調で書かれ，作曲家が外国の自然や文学から着想を得た奥行きのある作品をあえて選んだ。以下に，実際に演奏した作品の特徴と，演奏前の説明を含む演奏の工夫や，幼児の反応をまとめていく。

〇実践1回目　2021年7月お誕生会
対象：ちゅうりっぷ組（3～4歳児）
演奏曲目：シューマン作曲
　　《森の情景》Op.82より
　　第1曲〈森の入り口〉（1948-49）

ロマン主義思想において「自然」は中心的な概念の一つであった。作曲者シューマンは，文学を通してこの思想に早くから接していた。シューマンの音楽思想を特徴付けるものに「現実」と「非現実」,「自然」と「超自然」など，アンビヴァレントな表現世界がある注4)。この両極的な価値の行き来や混合は，音楽理論的な分析を超えた現実の世界と空想の世界の融合を示している。《森の情景》は，曲集名が示すように森に対するロマンティシズムに霊感を得て書かれた作品であり，シューマンがピアノ作品の中で自然という題材を正面から扱った代表作である。〈孤独な花〉や〈予言の鳥〉などのタイトルの付された9つの曲には，珍しいものに対する驚きや，美しいものへの感嘆が混ぜ合わさった世界が瞑想的な静けさと素朴な魅力をもって簡潔に描かれている。シューマンはヘーベルやアイヒェンドルフを中心に詩を選び，各曲に書き入れるように構想していたが，最終的に第4曲の〈不気味な場所〉以外の曲からは取り除かれた。演奏した第1曲の〈森の入り口〉にはプファリウスの以下の詩句が掲げられていた注5)。

私たちは，樅の木の並ぶ小道を歩く
背の高い草と苔むすところを抜けて
この道は，濃い緑の茂みの中へと続いている

本楽曲は変ロ長調で3部形式を取り，中間部が第1部の展開のようになっている。期待と不安を胸に森に足を踏み入れる気分が，2分弱と短い演奏時間の中にも巧妙に描かれている。不協和音の使用が目立つが，聴き手の耳をとらえ，森の中の光と影や，期待と不安が交錯するようなイメージを呼び起こさせる効果がある。音楽そのものがもつ詩的な刺激によって想像を掻き立てるため，演奏前の説明では，シューマンが森に関する詩にインスピレーションを得て書いた作品であることのみを告げ，詩の内容は伝えなかった。不協和音が多く使用されているが，演奏後「どうだった？」という演奏者の声かけには多くの園児が「きれいだった」と反応していた。

〇実践2回目　2021年9月お誕生会
対象：さくら組（4～5歳児）
演奏曲目：グリーグ作曲《叙情小曲集》
　第1集より〈妖精のおどり〉Op.12 No.4（1867）
　第3集より〈小鳥〉Op.43 No.4（1886）

シューベルトに始まり，メンデルスゾーン，そしてシューマンへと受け継がれたロマン派小品の流れには，グリーグにおいて北欧の光と影が与えられた。この曲集は，美しい曲想に加え，シューマンの時代から一般市民社会にピアノという楽器が普及したことや，大きな手を必要としない技術的な易しさによって高い人気を得た。自然に馳せる想いや，北欧の農民たちの素朴な生活が描かれたこの曲集は，37年に渡って描き続けられたグリーグのスケッチ画集のようである。演奏においては，ピアニスティックな効果が発揮できるように作られているため，短い時間でも楽想の輝きが印象に残りやすい。

第1集より〈妖精のおどり〉Op.12 No.4（1867）

妖精の束の間の踊りが，Sempre staccato の鋭さをもって展開される。上述の通り幼児はリズムの識別が可能であることを踏まえ，続けて演奏される2曲目の〈小鳥〉とリズムがはっきり異なるものを選んだ。演奏時間は約1分と短いが，光と

闇の交錯を思わせる *pp* と *f* の目まぐるしい交替をはっきり示すことにより充実させることができる。また，ここでは日本人が想像する絵本に出てくるような妖精の姿とは違った，北欧のいたずら好きな妖精の姿がホ短調で描かれている。演奏の前に園児に妖精のイメージについて尋ねたところ，「可愛い」「小さい」などの答えが返ってきたので，北欧でイメージされる妖精の姿について話してから演奏した。

第３集より〈小鳥〉Op.43 No.4（1886）

グリーグは，〈蝶々〉〈春に寄す〉などの名曲が含まれるこの第３集について，自分を圧倒した自然の様子を曲に託したと述べている注6)。ニ短調の和音で，高音域にも低音域にも現れる鳥のさえずりを模した音型は，奥行きのある趣を曲にもたらしている。園児たちが耳を澄ませて聴けるように曲間には充分な時間をとるよう留意した。

演奏時間は約２分であり，お誕生会全体の中での時間配分や，園児の集中力を考慮して，２曲の演奏が３分以内におさまるようにプログラムを組んだ。演奏前には題を伝えず，演奏後にどんな風に聴こえたか尋ねたところ，予想とは違い小鳥という回答は無く，メガマウスや，女の子という回答があったことから，園児たちが日常における体験やこれまでに得た情報からイメージを引き出していることが窺える。園の周りには普段カラスしか見られず，園児たちが実体験で作曲家が表したような鳴き声を聴いたことがあるかは定かではないが，改めて鳥の鳴き声を明らかに模倣している音型をピアノで演奏したところ，想像し頷く姿が見られた。

4. 3. お誕生会での２回の実践を経て

『音楽教育の哲学』の中で，リーマーは芸術について以下のように述べた。

> 芸術は，人間が主観的現実を探究し理解することのできる手段である。（中略）芸術作品は，感情を「概念化」するのではない。そうではなくて，芸術作品の美的特質が感情を喚起する条件を表出するのである。この美的特質を直接理解することによって，われわれは感情「についての知識」ではなく，感情「の経験」を受け取る。そして，この「の経験」が，感情の本質への洞察を得る特別の，独特のほかにない方法なのである。芸術は，人の感情経験を洗練し，深めるために利用できる最も強力な道具である。」注7)。

中村千晶は，リーマーが優れた音楽を用いて音楽表現が感じられる機会を子どもたちに用意し，美的な特質が共有される機会を絶えず与えることが重要であるとしたことに加え，幼稚園における音楽聴取の実験と，エクマンが幼児の情緒が遺伝，環境及び文化の影響を受けながら分化し，発達していくとしたことから，子どもを取りまく環境が情緒に影響を及ぼし，様々な経験が情緒の動機付けとなると述べている注8)。

こうした教育学者たちの先行研究と２回の実践を踏まえ，筆者は，鑑賞される作品が短調や不協和音の含まれる作品であったとしても，芸術として表現豊かで優れていれば幼児期の情緒の発達や美的理解を高めることにおいて良い影響を与えることができると考える。幼児は成人のような出会いの経験があるわけではなく，多様性や文化の違いを理解する機会は少ないが，だからこそ芸術作品を通して多様性を知り，想像することで違いを楽しむ心を養うことができるのではないだろうか。ノルウェーのグリーグが短調と鋭いリズムで表した北欧で想像される妖精の姿や，シューマンが不協和音を使用して表した森の光と影は，子どもたちの心に一般的とされるもの以上の想像力を育ませる。正高信男が鑑賞の観点から４～９歳児を対象に行った調査では，クラシック音楽の聴取において，健常児が協和音の音楽を好む傾向があるのに対し，ASD 傾向の子どもは不協和音を含む音楽を好む傾向があるということが分かっている注9)。今後は，美しさの多様性についても子どもたちが感じられるようなプラグラムを検討し，情緒の成長を促す音楽教育に生かして行きたい。

5. まとめ

附属幼稚園のホールにグランドピアノがあり，プロのピアニストの大学教員が園長に着任したことで始まった園児たちのクラシック音楽鑑賞を，大学と附属幼稚園の教育活動の連携として，園児の幼稚園生活の中での学びと，大学生の現場実践的な学びになるようにコーディネートし，毎月の実践を継続するのは，正直なところ，大変手間と時間のかかる作業であることには，始めてから気づいた。

しかし，これまでこの活動に関わった数十人の大学院生・学部学生の全員が，幼稚園児の前で得意分野の器楽や声楽を他では経験のないかたちにアレンジして演奏してみて，多大な発見と喜びを掴み実感して，その後の自身の音楽活動・教育研究活動のヒントやきっかけを得たと言って卒業・

修了していった。この活動の3年目2018年からは，「音楽ボランティア論／音楽フィールドワーク」という現場実践型の教科専門科目を大学で立ち上げ，授業の中で企画・準備・実施・振り返り（考察）を共有しながら，実践方法を体験しながら探るスタイルにこぎつけた。

音楽教育の専門家を育成するためのカリキュラムにおいて，附属学校や附属幼稚園を有する本学では，今後，より一層，音楽文化の背景にある知識や解釈などの座学と，レッスン室で学ぶ表現の技術，そして音楽がさまざまな現場で様々な年齢層の人に機能や影響をもつものであることの体験的な学びの連動に努め，社会的な成果をあげたいと考えている。

最後に，この連携活動に全面的に協力して戴いてきた附属幼稚園に心より感謝申し上げる。

引用文献

注1）安倍圭子『おもちゃのシンフォニー』CD解説　Xebec音楽出版　XEPC-4001
注2）杉本 啓「音楽聴取時における乳児の身体反応～音楽の感情価の差異における検討～」
https://www.hues.kyushu-u.ac.jp/education/student/pdf/2003/2HE01050S.pdf
（最終閲覧日：2021年9月30日）
注3）宮下東子「幼児の鑑賞と体験に関する一考察：対話型鑑賞を通して」『新潟県立万代島美術館研究紀要』2016年　pp.9-15
注4）西原　稔『シューマン　全ピアノ作品の研究　上』音楽之友社　2013年　p.25
注5）J. チセル『シューマン／ピアノ曲』東芝EMI音楽出版　1982年　p.141
注6）舘野　泉（解説）『グリーグ 叙情小曲集1』音楽之友社　1999年　p.97右
注7）B. リーマー『音楽教育の哲学』音楽之友社　1988年　pp.74-79
注8）中村千晶「幼児の音楽聴取に関する一考察」『教育学論究 第8号』関西学院大学　2016年　pp.127-134
注9）正高信男 Neurodiversity, giftedness, and aesthetic perceptual judgment of music in children with autism. Frontiers in Psychology　2017年　pp.1-8

参考文献

門馬直美（解説）『世界音楽大全集 器楽篇 第17巻　シューマンピアノ曲集3』音楽之友社　1957年
藤本一子『作曲家 人と作品 シューマン』音楽之友社　2008年
菅野浩和『グリーグ 生涯と作品』音楽之友社　1984年